

国際共同研究事業 共同研究報告書

令和 2 年 2 月 24 日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

所属機関・部局 国際基督教大学・教養学部

(ふりがな)

職・氏名 准教授・李 勝勲

1. 事業名 国際共同研究事業 スイスとの国際共同研究プログラム
2. 研究課題名 (和文) 音声音韻及び 로마字と元文字の新正書法: ヒマラヤの原住民話者への助力
(英文) Phonetics Phonology and New Orthographies: Helping Native Language
Communities in the Himalayas (PhoPhoNo)

3. 共同研究実施期間 (全採用期間)
平成 29 年 2 月 1 日 ~ 平成 32 (令和 2) 年 1 月 31 日 (3 年 0 ヶ月)

4. 研究経費総額

- (1) 本事業により交付された委託費 (研究経費 + 委託手数料)

総額 32,201 千円

初年度	(平成 28 年度) 委託費	<u>1,535</u> 千円
第 2 年度	(平成 29 年度) 委託費	<u>10,363</u> 千円
第 3 年度	(平成 30 年度) 委託費	<u>11,000</u> 千円
第 4 年度	(平成 31 年度) 委託費	<u>9,303</u> 千円

- (2) 本事業による経費以外の国内研究経費総額 0 円

* 本研究との関連において使用した補助金等の総額を 10 万円単位で記入してください。

(注) ※本報告書は、申請書の内容を踏まえて記入してください。

※特に指定のある箇所を除き、日本語で記入してください。

5. 研究概要（研究の目的・内容・成果等の概要を簡潔に記載してください。当初計画を変更した場合にはその内容及び理由も明記してください。また、どのような国際協働を実施したかについても明記してください。）

研究の目的: ネパールのタマン語の二方言とデンジョン語の基礎研究に基づき、これらの言語の音声の物理的な特質と音韻論的パターンを調査すること。

成果: 複数の発表と論文提出を行なった。また、現在執筆中の論文もある。その他、研究ツールの開発や共同研究を行なった。詳細は下記の通りである。

平成 28 年度

プロジェクトの目的は、タマン語（ネパール）とデンジョン語（シッキム、インド）の音声学と音韻論を研究することによって、これらの言語が使われているコミュニティーのために新しい正書法を提案することであった。毎週一回の研究会を開き、タマン語と近隣の言語の音韻システムに関する文献と、正書法の開発に関する文献を精査した。

Huang 博士がタマン語、デンジョン語ならびにチベット語とマナンゲ語の音声学・音韻論のシステムに関するマテリアルを作成した。これらの言語はすべてチベット・ビルマ語族の言語であり、ネパールやインドの公用語であるだけでなく、多くの話者の共通語としても使われているからである。

平成 29 年度

平成29年度は、音響とEGGの研究が中心となる時期であった。日本チームの目標は、ネパールのタマン語の二方言とデンジョン語の基礎研究に基づき、これらの言語の音声の物理的な特質と音韻論的パターンを調査することであった。

6月中旬から7月下旬までの期間は、調音とEGGのデータ収集にあてた。まず、日本チームとスイスチームがネパールのカトマンズで合流し、タマン語のマテリアル収集を協力して行なった。その後、Hwang博士とBajracharya氏がネパールで研究を続けている間、研究代表者（李博士とvan Driem博士）はインドのシッキムでデンジョン語のデータ収集を行なった。

12月には日本在住のタマン語母語話者と静岡にてミーティングを行い、タマン語のデータを収集した。

2月には日本チームでワークショップを行い、デンジョン語、ゾンカ語、及びタマン語に関する研究成果を報告、議論した。

平成 30 年度

平成30年度は、Nasometerおよび超音波を用いた音響的計測を行ない、これまで提示してきた仮説のさらなる検証を行なうことを目標とした。さらには国際学会や専門誌を通じた成果報告を行ない、プロジェクトメンバー以外の多くの専門家による助言を仰いだ。

フィールドワークは、3回行なった。

- ・8月には、東京都内でタマン語話者と面談を行ない（担当：研究代表者、Guillemot氏）、データ収集及び実験参加者収集にあたっての助言を仰いだ後、研究代表者（李博士）がネパールのカトマンズにてデータ収集を行なった。

- ・11月には、デンジョン語のデータ収集をインドのシッキムで約12日間行なった（担当：研究代表者、西田氏）。データ収集におけるOrthography Designに関しては、コンサルタントとしてDaehan Won氏の協力を仰いだ。

・3月には、再びインドのシッキムにてデンジョン語のデータを収集した（担当：研究代表者、Perkins氏）
さらに、三つのワークショップ（5月、9月、2月）により、学会発表、及びフィールドワークの準備、データ収集で用いるマテリアルの作成・考察、研究成果の報告と議論等を行なった。9月のワークショップには、スイスチームからvan Driem博士が来日し、参加した。

それ以外に国内外の学会やシンポジウムにて、研究発表や意見交換を適宜行なった。TAL学会（6月）、日本語学会（6月、11月）、日本音声学会（9月）、International Symposium on Applied Phonetics（9月）、ICLDC Conference（3月）、音韻論フェスタ（3月）等で研究発表をした。また、京都で行なわれたInternational Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguisticsでは、近年のチベット・ビルマ語族研究の動向を把握し、加えて今後の分析手法に関する有益情報を多数集めた。1月にはイタリアで行なわれたOld World Conference on Phonologyに参加し、今後の分析方法について、多くの専門家と意見交換を行なった。

平成31年・令和元年度

平成31年度には、これまで提示してきた仮説のさらなる検証を行なうことを目標とした。さらに、国際・国内学会での発表・参加を通じて、成果発表を行ない、プロジェクトメンバー以外の多くの専門家による助言を仰いだ。

平成31年度のワークショップは、6月（会津）と9月（慶應義塾大学）に行なわれ、1月にはPhoPhoNOプロジェクトのFinal Conferenceを開催した。1月のConferenceでは、プロジェクトメンバー以外の専門家や一般の方に対して、これまでの研究成果を発表し、意見交換を行なった。また、スイスチームからSelin Grollman氏とPascal Gerber氏が来日し、タマン語に関する研究成果を発表した。

さらに、International Conference on Phonetic Sciences（8月、メルボルン）、Seoul International Conference on Speech Science（11月）、International Conference on Phonetics and Phonology（12月、東京）等でも発表した。

平成31年のフィールドワークは下記の通りである。

・7月下旬～8月上旬：シッキム、インド（担当：研究代表者、Guillemot氏）

超音波によるデータ収集を行なった。

・11月中旬（担当：研究代表者、Villegas氏）

Youtubeやウェブサイトのアーカイブによってデンジョン語やデンジョン文化を紹介するため、音声データの収集を行なった。

当初計画からの変更

タマン語はもともと本研究が対象とする主要な二言語のうちの一つであったが、スイスのPIがタマン語話者との信頼できるアクセスを確保できなかったため、正書法の部分の調査は行なわれたが、音声の研究については、初歩的な段階に留まっている。

ゾンガ語とミャンマー語の調査は、デンジョン語に現れる音声との比較研究を行なうために追加された。スイス側のプロジェクトは、PIの病気によりスイスで延長され、プロジェクトはスイス側で現在進行中である。

国際協働の実施

毎年、スイスチームと日本チームの会議が、スイス（H29、H30実施）と日本（H31実施）で行なわれている。また、共同フィールドワークと音声学ワークショップがスイスで行なわれた。

7. 研究の成果（「5. 研究概要」の内容と対応させつつ、本研究によって得られた新たな知見、成果を平易な表現で記述してください。）

(1) 学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）

本プロジェクトでは、Nasometer, EGG, 超音波等を用いて三つの言語の音声と音響的な特徴を分析したことによって以下の三点が明らかになった：

- ・デンジョン語の音声カテゴリー
- ・ゾンカ語の声調パターン
- ・タマン語の声調カテゴリー

(2) 相手国との交流実績（本研究による国際共同研究の活性化や、両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果）

本研究によって以下の成果が得られた：

- ・文法記録と音声記録の相乗効果
- ・日本とスイスのポストクラとの共同作業によるタマン語についての論文
- ・van Driem と他のチームメンバーらによる JIPA 論文

また、数回のワークショップにより、スイスチームと研究計画・研究成果等について話し合った。

・2017年3月27～4月4日：研究代表者（Lee 博士）がスイスのベルンを訪問し、スイスチームと2017年6月と7月に行われる研究活動の詳細を決定し、ベルン大学の言語学科のセミナーで、チワン語の音声学・音韻論の分析の研究発表をした。

・2017年8月26～9月12日：スイスチーム研究代表者（van Driem 博士）が来日し、国際基督教大学にて研究会議を開催した。それまでの成果について報告、議論を行なった結果、タマン語に関して必要な追加調査項目が提示された

・2018年3月7～11日：日本チーム（研究代表者、Villegas 博士、Perkins 博士、Hwang 博士）がベルン大学を訪問し、ワークショップを行なった。

・2018年3月28～4月7日：スイスチームからは van Driem 博士を ICU に迎えて研究会を行い、これまでの成果報告や今年度研究計画及び進捗状況の確認を行なった。研究会には研究代表者に加え、桃生氏が参加した。

・2018年9月6～12日：スイスチームからは van Driem 博士が来日し、ICU にて研究会を行なった。

・2020年1月：ICU で行われた PhoPhoNO Final Conference の際に、スイスチームから Selin Grollman 氏と Pascal Gerber 氏が研究成果を報告するため、来日した。

(3) 社会的貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の広い意味での社会的貢献はどのようにあったか）

デンジョン語は、使用する若者の数が減少しており、絶滅の危機に瀕しているが、この研究によって記録が残されることになる。また、IRC 助成金（TUFS）を通じ、ウェブページのアーカイブ保存を行ない、デンジョン語やデンジョン文化を Youtube やウェブサイトのアーカイブによって紹介した。さらに、言語学的研究のために言語マップへの記載も行なった。

(4) 若手研究者養成への貢献（若手研究者養成への取り組み、成果）

グループメンバーに、若手研究者（川原氏と Perkins 氏）を迎えた。また、ポストドクには、研究方法、論文発表・作成の仕方、研究活動の組織の仕方などを指導し、アルバイトの学部生たちには、少数言語への魅力やデータ作成のスキルなどを伝えた。

(5) 将来発展可能性（本研究・交流事業を実施したことで、当初見込んでいた将来的な発展は認められたか。

またその可能性はあるか）

- ・音声ベースの記録を有することで、その言語を保持することが困難な状況下においても、正書法の開発が進められた。

- ・他の言語のさらなる調査が求められる。

(6) その他（上記(1)～(5)以外に得られた成果等があれば記述してください）

少数言語コミュニティー（デンジョン語/タマン語）および Bhutia Language Development Commission に影響を与えることができた。

8. 研究発表（本共同研究の一環として発表したもの、又は、発表予定のものについて記入してください。）

【雑誌論文】 計 (13) 件 うち査読付論文 計 (13) 件

通番	共著の有無*	論文名、著者名等**
1		著者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Haruka Tada, Hanna Kaji 発行年: 2017年 論文標題: A preliminary acoustic study of tone in Dzongkha 雑誌名: 日本音声学会予稿集 最初と最後の頁: 114-119 査読の有無: 有
2		著者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Haruka Tada, Hanna Kaji 発行年: 2017年 論文標題: The acoustic manifestation of laryngeal contrasts in Dzongkha: A preliminary study 雑誌名: 2017 Seoul International Conference on Speech Sciences [ISSN 2005-9299] 最初と最後の頁: 151-152 査読の有無: 有
3		著者名: Lee, S. J., Hwang, H.K., Monou, T., Kawahara, S. 発行年: 2018年 論文標題: The phonetic realization of tonal contrast in Dränjongke. 雑誌名: Proc. TAL2018, Sixth International Symposium on Tonal Aspects of Languages 最初と最後の頁: 217-221 査読の有無: 有
4		著者名: Lee, S. J. and S. Kawahara 発行年: 2018年 論文標題: The phonetic structure of Dzongkha: a preliminary study 雑誌名: Journal of the Phonetic Society of Japan 最初と最後の頁: 13-20 査読の有無: 有
5		著者名: Hyun Kyung Hwang, Seunghun J. Lee, Pascal Gerber and Selin Grollmann 発行年: 2019/4 論文標題: Laryngeal contrast and tone in Tamang: an analysis based on a new set of Tamang data 雑誌名: 音声研究23号 最初と最後の頁: 41-50 査読の有無: 有
6		著者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot and Tomoko Monou 発行年: 2019/4 論文標題: Acoustics of the four-way laryngeal contrast in Drenjongke (Bhutia): Observations and implications. 雑誌名: 音声研究 23号 最初と最後の頁: 65-75 査読の有無: 有
7		著者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot, Tomoko Monou 発行年: 2019/8 論文標題: The acoustic correlates of the four-way laryngeal contrast in Drenjongke stops 雑誌名: Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences, Melbourne, Australia 2019. Sasha Calhoun, Paola Escudero, Marija Tabain & Paul Warren (eds.) Canberra, Australia: Australasian Speech Science and Technology Association Inc. 最初と最後の頁: 1445-1449 査読の有無: 有
8		著者名: Céleste Guillemot, Seunghun J. Lee, Fuminobu Nishida 発行年: 2019/8 論文標題: An acoustic and articulatory study of Drenjongke fricatives 雑誌名: Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences, Melbourne, Australia 2019. Sasha Calhoun, Paola Escudero, Marija Tabain & Paul Warren (eds.) Canberra, Australia: Australasian Speech Science and Technology Association Inc. 最初と最後の頁: 1179-1183 査読の有無: 有

9	著者名: Seunghun J. Lee, Céleste Guillemot, Honoka Asai, Audrey Lai and Kotone Sato 発行年: 2019/9 論文標題: A preliminary study of the vowel length contrast in Drenjongke 雑誌名: 日本音声学会予稿集 33 査読の有無: 有
10	著者名: Julián Villegas and Seunghun J. Lee 発行年: 2019/11 論文標題: An electroglottograph study of tonal contrast in Drenjongke (Bhutia) 雑誌名: Proceedings of the Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 最初と最後の頁: 27 査読の有無: 有
11	著者名: Céleste Guillemot, Seunghun Lee, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou and Jeremy Perkins 発行年: 2019/11 論文標題: Perception of Vowel Length Contrast in Drenjongke (Bhutia) 雑誌名: Proceedings of the Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 最初と最後の頁: 30 査読の有無: 有
12	著者名: Seunghun J. Lee, Jeremy Perkins and Céleste Guillemot 発行年: 2019/11 論文標題: A preliminary ultrasound study of the retroflex contrast in Drenjongke 雑誌名: Proceedings of the Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 最初と最後の頁: 120 査読の有無: 有
13	著者名: Julián Villegas, Konstantin Markov, Jeremy Perkins, Seunghun J. Lee 発行年: accepted 論文標題: Prediction of creaky speech by recurrent neural networks using psychoacoustic roughness 雑誌名: IEEE Journal of Selected Topics in Signal Processing 査読の有無: 有

【学会発表】計 (29) 件 うち招待講演 計 (0) 件

通 番	共著の有 無*	標題、発表者名等**
1		発表者名: Seunghun J. Lee, 発表年月日: 2017/3/29 発表標題: The roles of phonation and F0 in Zhuang 発表場所: Universität Bern 学会等名: Berner Zirkel
2		発表者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Haruka Tada, Hanna Kaji 発表年月日: 2017/9/30 発表標題: A preliminary acoustic study of tone in Dzongkha 発表場所: University of Tokyo 学会等名: 日本音声学会
3		発表者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Haruka Tada, Hanna Kaji 発表年月日: 2017/11/11 発表標題: The acoustic manifestation of laryngeal contrasts in Dzongkha: A preliminary study 発表場所: Seoul National University 学会等名: 2017 Seoul International Conference on Speech Sciences
4		発表者名: Kawahara, S., S. J. Lee and T. Monou 発表年月日: 2018/6/9 発表標題: Tonal aspects of some Tibeto-Burmese languages 発表場所: NINJAL 学会等名: プロジェクト研究発表会
5	◎	発表者名: 桃生朋子, George van Driem, Selin Grollmann, Pascal Gerber, Seunghun J. Lee, Hyun Kyung Hwang, Jeremy Perkins, Julián Villegas, 川原繁人, 西田文信 発表年月日: 2018/6/16 発表標題: 音声音韻及びロマ字と元文字の新正書法: ヒマラヤの原住民話者への助力

		発表場所: The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo 学会等名: 海外学術調査フェスタ
6		発表者名: Lee, S. J., H.K. Hwang, T. Monou and S. Kawahara 発表年月日: 2018/6/18-20 発表標題: The phonetic realization of tonal contrast in Dränjongke 発表場所: Beuth University Berlin. 学会等名: The Sixth International Symposium on Tonal Aspects of Languages (TAL 6)
7		発表者名: Lee, S. J., H. K. Hwang, T. Monou and S. Kawahara 発表年月日: 2018/6/22 発表標題: Consonants as tonal targets in Dzongkha. 発表場所: Daito Bunka University. 学会等名: 2018 Spring Meeting of the Phonological Society of Japan.
8		発表者名: Perkins, J., S. J. Lee, S. Kawahara and T. Monou 発表年月日: 2018/6/23 発表標題: Consonants and tones: A view from two Tibeto-Burman languages. 発表場所: Tokyo University 学会等名: The 156th Linguistics Society of Japan.
9	◎	発表者名: Haruka Tada, Seunghun J. Lee, Tomoko Monou, Hyun Kyung Hwang, Céleste Guillemot, Jeremy Perkins, Julián Villegas, Shigeto Kawahara, Fuminobu Nishida, George van Driem, Selin Grollmann, Pascal Gerber 発表年月日: 2018/8/5 発表標題: PhoPhoNO project: Converging phonetics and phonology in suggesting orthographies for understudied Tibeto-Burman languages 発表場所: NINJAL 学会等名: 国際シンポジウムとポスターセッション
10		発表者名: Hwang, H. K., S. J. Lee, S. Grollmann and P. Gerber 発表年月日: 2018/9/15 発表標題: Laryngeal contrast and tone in Tamang: A preliminary study. 発表場所: Okinawa International University. 学会等名: The Thirty-Second General Meeting of the Phonetic Society of Japan.
11		発表者名: Guillemot, Céleste. and Seunghun. J. Lee 発表年月日: 2018/11/17 発表標題: An interaction between voicing and tone in Dränjongke fricatives 発表場所: Kyoto University 学会等名: The 157th Annual Meeting of the Linguistics Society of Japan
12		発表者名: Villegas, Julian and Seunghun J. Lee 発表年月日: 2019/2/28-3/3 発表標題: Creating maps for linguistic field-work using R. Technology Showcase Session 発表場所: University of Hawai'i 学会等名: The 6th International Conference on Language Documentation and Conservation (ICLDC6)
13		発表者名: Guillemot, Céleste, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou, Jeremy Perkins, Seunghun J. Lee 発表年月日: 2019/3/4-5 発表標題: A Quantitative Analysis of a Laryngeal Contrast in Drenjongke (Bhutia) fricatives. 発表場所: Meikai University (Urayasu Campus). 学会等名: Phonology Festa 14.
14		発表者名: Lee, Seunghun J. 発表年月日: 2019/3/8 発表標題: Phonetics and Phonology of segment-tone interaction in two Tibeto-Burman languages: Drenjongke and Dzongkha 発表場所: University of Delhi. 学会等名: Linguistics Colloquium
15		発表者名: Lee, Seunghun J. 発表年月日: 2019/3/14 発表標題: Multi Track Audio Editing Workshop. 発表場所: Makhim (Bhutia Kayrab Yargay Tsogpo Headquarter), Sikkim.

		学会等名: Denjongke Workshop
16		発表者名: Lee, Seunghun J. 発表年月日: 2019/3/14 発表標題: What Drenjongke (Bhutia) tells us about human language? 発表場所: Makhim (Bhutia Kayrab Yargay Tsogpo Headquarter), Sikkim 学会等名: Colloquium
17		発表者名: Lee, Seunghun J. 発表年月日: 2019/3/27 発表標題: Segment-tone interaction in two Tibeto-Burman languages: Drenjongke and Dzongkha. 発表場所: University of Macau. 学会等名: Colloquium
18	◎	発表者名: Tomoko Monou, Céleste Guillemot, Seunghun J. Lee, George van Driem, Shigeto Kawahara 発表年月日: 2019/7/6 発表標題: 音声音韻及びロマ字と元文字の新正書法2019: ヒマラヤの原住民話者への助力 学会等名: 海外学術調査フェスタ 発表場所: 東京外国語大学
19		発表者名: Céleste Guillemot, Seunghun J. Lee, Fuminobu Nishida 発表年月日: 2019/8/5-9 発表標題: An acoustic and articulatory study of Drenjongke fricatives 学会等名: The International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) 2019 発表場所: Melbourne, Australia
20		発表者名: Seunghun J. Lee, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot, Tomoko Monou 発表年月日: 2019/8/5-9 発表標題: The acoustic correlates of the four-way laryngeal contrast in Drenjongke stops 学会等名: The International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) 2019 発表場所: Melbourne, Australia
21		発表者名: Seunghun J. Lee, Céleste Guillemot, Honoka Asai, Audrey Lai and Kotone Sato 発表年月日: 2019/9/28 発表標題: A preliminary study of the vowel length contrast in Drenjongke 学会等名: 日本音声学会第33回大会 発表場所: 清泉女子大学
22		発表者名: Seunghun J. Lee, Jeremy Perkins and Céleste Guillemot 発表年月日: 2019/11/15-16 発表標題: A preliminary ultrasound study of the retroflex contrast in Drenjongke 学会等名: Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 発表場所: Seoul National University
23		発表者名: Céleste Guillemot, Seunghun Lee, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou and Jeremy Perkins 発表年月日: 2019/11/15-16 発表標題: Perception of Vowel Length Contrast in Drenjongke (Bhutia) 学会等名: Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 発表場所: Seoul National University
24		発表者名: Julián Villegas and Seunghun J. Lee 発表年月日: 2019/11/15-16 発表標題: An electroglottograph study of tonal contrast in Drenjongke (Bhutia) 学会等名: Seoul International Conference on Speech Sciences 2019 発表場所: Seoul National University
25		発表者名: Seunghun J. Lee 発表年月日: 2019/12/8 発表標題: Phonetic features of Drenjongke (Bhutia) 学会等名: チベット=ビルマ言語学研究会 (Tibeto-Burman Linguistic Circle) 第49回会合 発表場所: 神戸研究学園都市 UNITY
26		発表者名: Céleste Guillemot, Tomoko Monou, Shigeto Kawahara, Seunghun J. Lee 発表年月日: 2019/12/13-15 発表標題: Prosody comes first? Phonetic realization of long vowels in Drenjongke 学会等名: The 6th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology

		発表場所: 国立国語研究所
27		発表者名: Seunghun J. Lee, Céleste Guillemot, Kunzang Namgyal, Jigme Wangchuk Bhutia 発表年月日: 2019/12/13-15 発表標題: Prosodic cues of polar questions in Drenjongke (Bhutia) 学会等名: The 6th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology 発表場所: 国立国語研究所
28		発表者名: Seunghun J. Lee, Céleste Guillemot, Kunzang Namgyal, Jigme Wangchuk Bhutia 発表年月日: 2020/2/15-16 発表標題: Intonation of Questions in Drenjongke (Bhutia) 学会等名: Prosody and Grammar Festa 4 発表場所: 神戸大学
29		発表者名: Céleste Guillemot, Seunghun J. Lee 発表年月日: 2020/3/15-16 発表標題: Phonetic Variation of a Phonological Target: Voiceless Nasals in Drenjongke (Bhutia) 学会等名: 音韻論フェスタ (学会がコロナウイルスの関係で中止されました) 発表場所: 同志社大学

【図 書】 計 (0) 件

通番	共著の有無*	題名、著者名等**
1		

* 相手国研究代表者との共著（共同発表）がある場合は○、相手国研究代表者との共著であり謝辞等に事業名を明記している場合は◎と記入。

** 当該発表等を同定するに十分な情報を記載すること。例えば学術論文の場合は、論文名、著者名、掲載誌名、巻号や頁等、発表年（西暦）、学会発表の場合は標題、発表者名、学会等名、発表年（西暦）、著書の場合はその書誌情報、など（順番は入れ替わってもよい）。

*** 足りない場合は適宜行を追加すること。

10. 今後の展望（今後の国際共同研究・協力体制の維持・発展に向けた展望について、具体性・実現可能性等を踏まえて、継続的に展開していくための計画を記述してください。）

国際プロジェクトは、日本において、世界の他の地域と関わる調査を発展・維持するための貴重なプロジェクトである。特に、二カ国共同助成は、若い研究者の育成の助けにもなっている。現在、スイスチームはヒマラヤの他の二つの言語について取り組んでいるが、今後、日本からもより多くの研究者が音声学の発展に関わっていくことが望まれる。

<備考>

1. この報告書は、共同研究の全採用期間が終了した翌月末（3月末に終了する場合は翌年度4月30日）までに提出してください。
2. 本会の事業報告等に記載するための適当な図・写真があれば、説明を付して添付してください。
3. この報告書は、本共同研究の成果として本会ウェブサイトに掲載します。また、この報告書を本会の事業報告として刊行する場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。
4. 知的財産権等の事情で本報告書の一部の公開を希望しない場合は、対応についてあらかじめ本会担当者に相談してください。